

週末の夜。私はいつものように、幼馴染である涼真のマンションを訪れていた。

お隣同士だった私たちは、大人になってそれぞれの道を歩み始めてからも、その距離感が変わることはなかった。むしろ、お互いに一人暮らしを始めてからの方が、こうして二人きりで過ごす時間は増えたかもしれない。

幼い頃から、同じ年なのに涼真は私の面倒を見てくれた。そんな彼に、私は今でも甘え続けている。

(……ふう、落ち着く。いつ来ても涼真の部屋って、本当に綺麗でいい香りがするなあ……)

モデルルームのように整えられた清潔なリビングには、彼が選んだ静かなジャズが低い音量で流れ、高級感のあるディフューザーの香りが微かに漂っている。暖色の間接照明が、柔らかな夜の静寂を演出していた。そんな空間に溶け込むように佇む涼真は、すっきりと整った顔立ちをしていて、どこか現実感が薄れるほどだった。

「はい、お疲れさま。今週もよく頑張ったね」

キッチンから戻ってきた涼真が、私の隣に座ってグラスを差し出した。

彼特製のフルーツカクテル。透明なグラスの縁には、丁寧にカットされたライムとミントが飾られている。カフェの店長を務める彼の所作は、いつ見ても無駄がなくて美しい。

「ありがとう！ わぁ、いい香り。……………うん、美味しい！ やっぱり涼真の作るお酒が一番だよ」

「それはよかった。お前、外ではあんまり飲みすぎるなよ？ 俺以外、面倒見きれないだろ。お酒くらい、ここに来ればいつでも作ってやるからさ」

涼真はそう言って、いつもの穏やかな笑みを浮かべた。その眼差しは優しさと包容力に満ちている。

「ふふ、そうだね。涼真がいてくれて助かるよ」

（……涼真って本当に、何年経っても変わらずに優

しいな。……でも、最近ちょっと頼りすぎかも。私、彼がいないと何もできないダメ人間になっちゃいそう……)

「ほら、これも食べなよ。お前の好きなチーズ、取り寄せたんだ。お前、これがあると機嫌良くなるだろ？」

涼真が差し出したのは、数種類のチーズが美しく並べられたウッドプレートだった。どれも私の好みを完璧に把握したセレクトだ。

「えっ、本当？ 嬉しい！ いただきます！」

「そうだ。この前行きたいって言ってた、あの予約困難なフレンチのお店。来月の週末に予約を入れられそうなんだけど、お前の予定はどう？」

「……あ、それなんだけど」

私は濃厚なチーズを味わい、カクテルを一口含んでから、少し言い淀みながら話し始めた。

「実はそのお店のことさ、職場の先輩の佐藤さんに言ったら、ちょうど佐藤さんもずっと行きたかったらしくて。『じゃあ今度一緒に行こうか』って話になったんだ」

何気ない日常の報告のつもりだった。けれど、その言葉を発した瞬間、音を立てて涼真が自分のグラスをテーブルに置いた。

それは決して乱暴な音ではなかったけれど、硬く、冷たい響きを持って私の鼓膜を震わせた。一瞬にして、部屋の空気が数度下がったように感じられた。

「……佐藤さん？ それって、男の人だっけ？」

「え、うん。二つ上の先輩だよ。すごく仕事ができる人で、いつも助けてもらってるんだ」

「そうか……………」

(……あれ？ 涼真、急に黙り込んで……。もしかして、怒ってる？ 後から勝手に約束したの、まずかったかなあ……。でも先輩だったし……)

「……そう、そっか。佐藤さんと、フレンチね……」

「ごめん、言うのが遅くなっちゃって……。怒ってる？」

「怒ってないよ。……ただ、お前は本当に無防備だなんて思っただけ」

「え……？」

（涼真……？ 今、一瞬だけ、目が笑ってなかったような……）

驚いて涼真を見ると、彼はいつものように笑みを浮かべていた。けれど、その笑顔はどこか固いような気がする。

「ちなみに、行くのってランチ？」

「ううん、ディナー。なんかその時間しか予約が取れなかったらしくて」

「……ディナー。その人は、お前がどれだけお酒に弱いか知ってるのか？ 酔うとすぐに顔が赤くなって、隙だらけになって……。誰にでも懐いちゃうってこと」

「そ、そんなことないってば。それに、佐藤さんと

プライベートで飲みに行くのは初めてだし、ちゃんと気をつけるよ」

「……そんな無防備な姿を、他の男に見せていいと思ってるの？」

涼真が私の方へわずかに体を向けた。その威圧感に、思わず肩が跳ねる。

「俺は心配なんだよ。お前は純粹すぎて、悪い男に付け込まれやすいから。……お前を守れるのは、俺だけだって……まだ分からない？」

「で、でも……」

沈黙が流れる。

気まずさを誤魔化そうと、私は慌てて手元のグラスを手を取った。けれど、指先がわずかに震えて、グラスを倒してしまう。

「あ……っ！」

手が滑り、琥珀色のカクテルが私の膝の上に零れた。スカートに、じわりと大きなシミが広がっていく。

「わ、わっ、ごめん！ 涼真、こぼしちゃった……
！ 拭くもの、何かちょうだい！」

慌てて立ち上がろうとした私の肩を、涼真の手が力強く押さえつけた。

「じっとしていて。動くと汚れが奥まで染み込んで、落ちなくなるから」

涼真の声は、先ほどまでの冷たさを維持したまま、どこか命令めいた響きを帯びていた。彼は床に膝をついて、いつの間にか用意していた真っ白なタオルを手を取った。

「かわいそうに。冷蔵庫で冷やしていたカクテルだから、冷たいだろ」

涼真はそう低く呟くと、タオルの上から私の太ももを、ゆっくりと拭き始めた。

円を描くように、丁寧に。最初は膝のあたりを。

けれど、その手の動きは、次第に汚れのない場所へと、スカートの裾を押し上げるようにして上へと向かっていく。

「あ、あの、涼真……。もう大丈夫だよ、あとは自分で拭くから……。それに、黒いスカートだから目立たないし……！」

「ちゃんと拭かないとな。お前の服を汚したままにはしておけないよ」

(……待って、だって、そっちは……！)

かなり際どい場所に触れてくる。

抵抗しようとしても、肩を押さえる彼の力は緩まない。それどころか、彼の顔が私の膝元に近づき、その吐息が肌に触れる距離にまで迫る。

「……もしかしたら、下まで染みているかもしれな

いな」

涼真はそう独り言のように呟くと、迷いのない手つきで私のスカートの端を掴み、ぴらっと捲り上げた。

「ひゃっ！？ りょ、涼真……っ！？」

目の前が、真っ白になった。太ももが、涼真の目の前で剥き出しになっている。それだけじゃない。捲り上げられたスカートの奥、淡い色の下着のラインまでが、涼真に晒されている。

（……うそ、ちょっと待って！ 下着まで、見えてる……っ！）

羞恥心で顔が火を吹いたように熱くなる。私は反射的に、自分の手でスカートを抑えようとした。けれど、私の肩を固定している涼真の腕は、びくともしない。

「り、涼真、ダメ！ もういいってば……っ！」

必死で彼の肩を押し返そうとする。けれど、涼真は私の抵抗など最初から計算に入れていないかのよう
に、淡々とした口調で私を諭した。

「動くなって言っただろ。……ほら、やっぱり下着のレースのところまで染み込んでる。このまま放っておいたら、ベタついて気持ち悪いし、生地が傷んで二度と履けなくなるよ」

涼真の声は、どこまでも穏やかで、いつものトーンだった。でも、その瞳の奥には、私を逃がさないという冷徹なまでの意志が宿っている。彼はそのまま私の太ももを大きな手で掴むと、自然な動作で、私の脚を大きく割り開かせた。

「っ！？ りょ、涼真……っ、待って、だめ……っ！」